

実践報告

ICT を活用した遠隔実習の取り組み —コロナ禍での老年看護学実習の展開—

前原 なおみ*・堂本 司*・千田 昌子*・井上 深幸*

I. はじめに

2020年度の大学教育は、COVID-19によるパンデミックの対応に始まった。本学は大学院教育で導入していたICTを活用した遠隔授業を直ちに学部教育にも整備し、2020年度春期から遠隔授業を開始した。

従来からICTツールとして使用しているリアルタイム遠隔授業システムCiscoWebexは、画面共有機能やブレイクアウト機能を活用することで、講義とグループワーク、発表を組み合わせた講義が可能である。しかしながら、臨地実習は、看護実践のプロセスの経験を前提としており、講義とは異なる学修目標を達成するための工夫が求められた。一方で、4月から5月にかけてCOVID-19感染者に対する重症者数が増加に伴い高齢者の死亡率が11%と最も多いことが発表され7月には28.7%となった。このような状況下において、筆者らが担当する老年看護学実習では、密な接触による高齢者への影響と学修効果の双方から実習方法について検討する必要がある。また、本学のガイドラインにおいても遠隔授業のレベルであったことからリアルタイム遠隔授業システムを用いた代替実習（以下、遠隔実習）に向けて準備し、7月から取り組んだ。

本稿では、コロナ禍における老年看護学実習の取り組みを報告するとともに、遠隔実習がも

たらした効果について若干の考察を加えることとする。

II. 老年看護学実習の構成

本実習は、90時間の病院実習と45時間の施設実習で構成され、施設実習は病院実習の終了後の同時期に行うよう配置している。遠隔実習においても、教育効果を意図した治療の場と生活の場を継続した実習配置を踏襲した。

III. 病院実習における遠隔実習の取り組み

1. 遠隔実習の概要

コロナ禍における厚生労働省・文科省からの臨地実習に関する通達では、臨地実習の代替案は教育内容の縮減を認めることではないこと、および「求められる実践能力と卒業時の到達目標を到達度」に照らして評価することが繰り返し強調されている。

核家族化、個室化が進み、SNS等のコミュニケーションツールを日常的に活用している近年の学生は、多様な年齢の人々と関わること、特に高齢者との関わりが少なく、高齢者の多様性と個別性を理解することが困難である。さらに、臨地で実習できない状況により、高齢期における健康障害が生活に及ぼす影響を捉えたり、高齢者の持てる力に着目して看護を展開したりすることは困難であり、臨地実習ができないこと

*京都看護大学

に対する不安は大きい。それ故、遠隔実習においても実習目標（表1）の到達に向けて、学びの質を担保するための工夫が求められる。

そこで、直接患者と関わることができない中でも学生が学習意欲を持続し、学習効果を高める方法として、臨地実習同様に健康障害を持つ高齢者を一人受け持ち、2週間で看護過程を展開した。学生は、入院中の「高齢者のイメージがわからない」と考えられたことから、高齢者をリアルに捉える工夫として、視聴覚を用いた教材を活用した。また、「看護実践のイメージがわからない」と考えられたことから、看護場면을注意深く観察し計画する機会を設けた。さらに、学生の直接体験の機会を保障するために、オンラインカンファレンスを実施し、指導者に対して計画発表や直接質問する機会を設け、最終日に看護の評価を行った。

2. 実習アウトライン

1) スケジュールと方法

病院実習は7月27日から9月25日の8クールで実施した。学生は2単位90時間を10日間で実習した。1グループは4から6名で構成し、グループで一人の高齢者を受け持った。1日の実習スケジュールは図1のとおりである。

2) 遠隔実習における倫理的配慮

学生は、大学と実習施設に対して個人情報保護に関する誓約書を交わした。また、遠隔実習を行うにあたり、大学は患者とその家族及び実習施設に対し誓約書を交わした。家族との面会が制限された時期であったため、遠隔実習の目的と方法は、病棟師長から本人及び家族に連絡を取っていただき、患者本人には教員が口頭と文書を用いて説明し、関わるたびに同意を得た。

表1 実習目標

実習目的

高齢者の加齢による諸機能の変化、健康障害、生活機能、心理社会面及び発達課題を統合してとらえ、高齢者の特性を踏まえた看護過程を展開できる能力を養うと共に、さまざまな健康状態や生活に応じた看護師の役割について理解する。

実習目標

- 1) 高齢者の自律的な生き方に寄り添う関係を築くことができる。
- 2) 高齢者の健康状態や生活に合わせ、生活行動モデルを用いて看護過程が展開できる。
- 3) 高齢者の健康状態や生活に応じた看護を実践できる。
- 4) 高齢者を支える多職種連携における看護活動が理解できる。



図1 1日の実習スケジュール

3) 実習方法の工夫

患者と直接関わることができない中で学生の学習意欲の維持・向上と学習効果を高めることへの工夫が必要であった。そこで(1)リアルな患者・リアルな看護場面から学ぶ、(2)主体的な学習者として学ぶ、(3)「できる」から「わかる」を強化して学ぶの3点に焦点をあて代替実習を計画、実施した。

(1) リアルな患者・看護場面から学ぶ

実習前の学生からは「臨地に行くか行かないか、直前までわからないことが不安」「高齢者のイメージがわからない」「治療や看護のイメージがわからない」「病院での看護師の役割や多職種連携のイメージがわからない」「就職時に困るのではないか」という意見が多く聞かれた。そのため、リアルな学びを支援する方法として、3つのリアルを取り入れる工夫を行った。

①オリエンテーション

学生は、生活援助論実習で臨地実習を修了しているが、1年以上の期間があり、病院・病棟そのものを想起できない状態にあった。そのため、病院・病棟ともに動画を活用したオリエンテーションを行うこととし、さらに指導者から申し出があり、これまでの臨地実習で行ってきた方法である“学生を同行して病棟を説明するウォーキング型病棟オリエンテーション”を実施した。オリエンテーション動画は、看護ステーションの様子、学生の荷物置き場、ホワイトボードの見方、入退院支援ボードと多職種連携ボード、点滴の攪拌作業を撮影し、その後、廊下を歩きながら、高齢期の特徴を踏まえた病棟の工夫と、実際に起きている事故とその対策、認知機能低下に合わせたセンサーマットや離床検知装置の取り扱いを説明した。説明には質問形式のコメントを組み込み、学生が病棟の雰囲気を感じながら思考できるよう工夫した。

学生からは、「実習のイメージがわからず恐怖で

しかなかったが動画で思い出すことができた」「学生の物品置き場や使用トイレの説明があり、指導者が受け入れてくれていると感じた」「歩行補助具の種類が多さに驚いた」「おむつ用台車や経管栄養用の点滴スタンドがあり、老年期の看護特徴が理解できた」「看護師の動きがわかり、頑張ろうと思えた」などの意見があった。

実習2週目には多職種連携の学びを深めるために、地域連携室看護師、事故対策室看護師、感染管理室看護師、理学療法士からのオリエンテーション動画を取り入れた。多職種から協働の工夫や困難点の説明と激励を受け、学生はどのように工夫がなされているかについて学習できた。

②患者情報

患者情報は、リアルな患者像と看護場面をイメージするために重要である。そのため、カルテとコミュニケーションから教員が収集し、また本人と家族の同意の下に撮影した動画を用いた。基本情報、血液データと薬物は、アセスメントに影響のない範囲で数値や薬品名を変更し、個人が特定されない方法で活用した。学生の学習に必要な患者情報としての動画は6項目(表2)とし、患者の負担になりやすいため、患者の生活に合わせて撮影した。

学生は初日から動画を視聴し、気付きを共有したり、観察したことをどのようにアセスメントするかについて意見交換したりした。また3側面からの気づきを支援することで、学生からは「同じ動画を見ていても視点が違うことに驚いた」「視点を変えながら何回か見ることで、老年期の特徴がよくわかった」「意見交換することで新たな視点で観察できるようになった」などの感想があり、患者をリアルな存在と感じ、部分的な情報ではあるが全体像の把握につなげていた。

(2) 主体的な学習態度を支援する

①時間の活用と管理

臨地実習では、病棟到着時に学生が主体的に挨拶して実習開始となる。遠隔実習も同様の方法とし、開始時間にその日のリーダーが挨拶し、目標と行動計画を発表する形で実習を開始した。遠隔実習では、1日4回のオンラインタイムを設けているが、リーダーが開始の挨拶をすることで、メンバーは連絡し合い、遅刻がなくなり、時間管理ができた。

また、2週目のオンラインタイムは学生が方法と内容を決めるよう支援した。その結果、意見交換の多いグループや個人で取り組んでから意見交換したいグループなど、グループに合わせた方法で時間を活用するようになった。

②情報収集

臨地実習では、学生は自らカルテを開き、取捨選択しながら情報収集して全体像を抽出する。特に高齢者は既往や経過など情報量が多いため、情報収集にも工夫が必要であり、その過不足が看護力として試される場面でもある。しかし、遠隔実習では学生は受け身になりやすく、与えられた情報から分析することが予測された。そのため、実習初日に患者の基本情報、現病歴と経過を伝え、それ以外は、学生からの質問に回答するかたちで情報を伝達した。その結果、開始当初は戸惑っていた学生も、グループで協力してデータの項目不足を抽出し、既習の講義や

演習プリントを活用し、学修目標の到達としての6つの生活行動と疾患の視点で情報収集することができた。

一方で、患者の情報は常に変化しており、生活機能やニーズは経時的に変化する。そのため、実習5日目に指導者とのオンラインカンファレンスを行い、不足情報を直接質問する時間を設けた。学生は疑問に思っていることや分析困難な情報、退院支援の実際や患者の思いについて質問し、また実際の看護場面での工夫について知ることができた。

③「看護師になる」ことを支援する

臨地実習では、受け持ち高齢者からのみ学ぶのではなく、指導者や病棟看護師をモデルとして考え方や伝え方について学ぶが、遠隔実習では看護師との交流が困難である。そのため、オンラインカンファレンスでは、学生の日常的な疑問を聞く時間を設け、人間的な交流を支援した。

学生は、指導者に看護師になるうえで大切にしていることや、夜勤は怖くないか、徘徊時の工夫、休みの使い方、学生に身に付けてほしい技能などについて質問した。その結果、看護師も同じ思いであることや看護師の生活を垣間見ることができた。

(3) 「できる」から「わかる」学習へ

臨地実習では、看護計画を立案し、実践・評

表2 患者情報としての動画場面

- | |
|---|
| 1. 挨拶、日常のコミュニケーション場面 |
| 2. 生活環境 |
| 3. 生活行動(食事前中後、移動・移乗、体位変換など) |
| 4. 作業療法・理学療法・言語療法の場面 |
| 5. 生活や退院への思いを語る場面(疾患について考えていること、入院前の生活や現在の楽しみ、退院後の生活、家族のことなど5分程度) |
| 6. 処置の場面(服薬管理、点滴管理、胃ろう管理、ミトンの装着など) |

価というPDCAサイクルでの学びが可能である。遠隔実習はすべてオンラインであり、実践、評価の工夫が必要であった。そこで、既習の技術動画をもとにしながら、撮影した動画から患者の持てる力を活用する看護技術の習得を支援し「わかる」ことに注力した。動画の撮影時は、毎回本人、看護師・介護士・作業療法士等に目的と方法を説明して同意を取り、希望された場合は、音声のみを録画した。すべての動画は教員が管理し、1週目は教員が目標に合った動画を選択して流し、2週目は学生の主体性に応じて希望する場面を流した。オンライン環

境が不安定な学生に配慮して、動画は2回ずつ視聴し、その後に安全、安楽、自立・自律の視点で気づきを促し、作業領域、必要物品、自律を支援する言葉、ボディメカニクスなど援助で工夫した点や、援助後の患者の感想等を意図的に伝え、臨場感が持てるようにした。学生は、実習期間中を通して生活援助技術と診療援助技術を1つずつ取り上げ、手順書を作成し、教員を患者役としたロールプレイを行った。ロールプレイの中で、援助の根拠やさらなる工夫点について意見交換を行うことで、受け持ち高齢者の機能や生活にあわせた看護援助の工夫を学ぶことができた。学生からは、「手順は根拠に基づいて計画する。しっかり考えることで患者の機能が活用できることがわかった」「看護場面を繰り返し見るとは臨地に行くよりも学びになった」「手順を作成して、実践したかったと思いが強くなった」という意見があった。

4) 実習評価

すべての学生は、実習目標を60%以上修得し、実習の認定を受けた。

学生アンケートでは、「実習目標を理解し、目標が達成できるよう努力した」で、98%がとても思う・思うと回答した。学生は、2年次の講義で事例展開を行い、高齢者は複数の疾患

を持っていることや合併症を予測して予防する必要があることを理解していたが、「動画や指導者の協力を得ることにより、最後までやり抜くことができた」「動画を見ることで患者に感情を寄せることができ、指導者から退院の話を聞くことで喜ぶことができた」などの意見があった。「文献や事前学習を活用して、学習を深めることができた」の質問は、100%がとても思う・思うと回答した。学生は、記録作成のために教科書を常に手に取り、調べながら記録した。また、画面共有機能を活用して記録を共有し、意見交換しながら実習を進めた。「患者のアセスメントは困難で、記録は講義より大変だった」「単純に分析できることばかりではなく、話し合うことで成長できた」「文献で根拠を用いることの大切さを学ぶことができた」などの意見があった。さらに「全体として充実した実習であった」の質問は100%の学生がとても思う・思うと回答した。患者への「援助場面を繰り返し見ることや事例をグループで展開したことで充実していた」と回答した。また、「高齢者の特徴には個人差が大きく、ニーズも多様である。そのことから、強みを引き出す援助方法が分かった」「多職種連携の必要性と具体的な内容が学べた」などの意見があった。

IV. 介護老人保健施設における遠隔実習の取り組み

1. 遠隔実習の概要

高齢者の今後の医療需要の大半は「救命」「治療」から、複数の慢性疾患がときおり急性悪化を繰り返しながら死に至る高齢者特有の病態への対応に移り、重点が「老いのプロセスを支え統合を支援する」「生活の質の向上」にシフトすることを見据えた看護教育が求められる。本学の施設実習では、高齢者総合機能評価の観点から発達課題、加齢による諸機能の変化、健康障

害、生活機能、および心理社会面を統合してとらえ、多職種協働による日常生活への援助やコミュニケーションをとおして、生活を支え QOL を高める看護ができる能力を養うと共に、生活の場における看護師の役割について理解することを目的としている。

施設の遠隔実習は、CiscoWebex が使用できる iPad を施設に配送することから始めた。施設環境と高齢者が理解できる場面の動画撮影を行い遠隔実習に向けて準備した。撮影場面は個人が特定されない場面を選んだ。実習指導者への質問と、指導者からの助言を得ること、多職種参加によるオリエンテーションと多職種の意見を反映したカンファレンスの実施においてリアルタイム遠隔授業システムを活用した。5日間の遠隔実習内容（表3）を施設実習指導者と検討を重ね計画し学生の目標到達を支援した。

2. 実習方法の工夫

実習スケジュールと方法

3回生 85名の実習学生を対象に、4クールで実施した。学生は4～6名の4グループに分かれ、ターミナルケアを要する高齢者や、医療処置を要する認知機能が低下している高齢者を、グループごとに1名ずつ受け持った。

実習目標の「高齢者と心地よい関係を築くことができる」「高齢者の健康状態や生活に応じた看護実践ができる」については、高齢者の個性を把握したうえで具体的な方法が修得できるよう「対象高齢者に応じたコミュニケーション方法の工夫を考慮した計画立案」「全人的に捉えたアセスメント」「高齢者のアセスメントに基づいた看護計画立案と理論を用いた QOL の視点からの省察」を本実習の到達目標とした。「多職種連携における看護活動の理解」や「生活者としての高齢者の全体像と看護の焦点化」は、先述の動画やオンラインを活用した実習指導者とのやり取りによって到達可能と判断した。

3. 実習指導の実際と学生の到達度

1) コミュニケーション方法の工夫を考慮した計画立案

コミュニケーションに関しては、一般的な加齢の変化による影響についての知識の想起を促した上で、受け持ち高齢者はどのような状況にあるのか、コミュニケーションの要素について、ひとつひとつ情報収集するよう促した。その後、学生が個別の高齢者を理解するために観察することに替えて、実習指導者へ、観察すべきと考える情報について質問する機会をもった。実習指導者からは、質問への回答とともに、施設の専門職とのやりとりも提供してもらい、学生は、受け持ち入所者との関わりの留意点を確かな知識にしていた。学生が立案した看護計画の中で、どのように関わり、言葉掛けをして伝えるべきか、多くの学生が行動レベルで、具体的に記載することができた。

2) 全人的に捉えたアセスメント

基礎情報（既往歴・認知状況・ADL・直近の検査データ・医療処置内容・普段の様子）、内服薬一覧、施設サービス計画書、リハビリテーション計画書をもとに高齢者理解に取り組んだ。看護援助をするために必要な追加情報を、情報として必要な理由とともに考え、実習指導者に質問することで、意図的に情報収集ができた。また、学生の質問に対して、実習指導者が、受け持ち入所者の様子やエピソードについて、画像を用いて紹介したことで、学生はより受け持ち高齢者のイメージを深めていた。

加齢による低下と健康状態の影響を受けながら生活する高齢者の理解は、やや困難であった。病院実習ですでに全体像の把握についてはイメージできていたため、環境と健康状態がどのように違うかについて理解を促す支援を行った。高齢者の機能低下を回復する視点のみではなく、コンフォートな状態への看護の視点についても

ICTを活用した遠隔実習の取り組み

理解を促したが、遠隔実習では実際の高齢者の強さと弱さを感じることができないことが理解に影響したと考えられる。持てる力を活用するのか、安静が求められるのかの判断を含む予測を含めた高齢者の全体像を捉えるためには、その人の生活行動援助を通して理解することが必要であると考えられる。

- 3) アセスメントに基づいた看護計画立案と QOL の視点からの省察
看護計画の立案に関しては、アセスメントか

ら導き出されたすべての看護の焦点に対して、看護計画を立案した。グループで立案した看護計画に対して、実習指導者から疾患に対する援助項目や予防的な視点、看護の焦点の優先順位に関する助言等を受けた。最終的には回復して退院していく高齢者との違いや、ターミナルケアが行われている時期でも強さを支援するといった看護実践について、学生は理解できていた。

表 3 施設遠隔実習内容

	実習内容	実習施設指導者による指導内容
1日目午前	施設オリエンテーション	老人保健施設に配置されている各職種が、それぞれの役割と専門性等について臨地の様子を撮影した動画を用いて解説。 <ul style="list-style-type: none"> ・看護師 ・理学療法士 ・介護士 ・介護支援専門員 ・作業療法士 ・管理栄養士
午後	オリエンテーションの振り返り 受け持ち対象者の情報収集 看護展開に必要な情報を抽出 ・どのような情報が何故必要かについて考える	対象者の情報提供
2日目午前	受け持ち対象者の情報収集 援助にあたって必要な情報を抽出	
午後	アセスメントに必要な利用者の情報を指導者に相談	学生の質問に対する情報またはそれに関する映像を学生に提供
3日目午前	情報の整理 看護計画立案	
午後	情報の整理 看護計画立案 グループ計画作成	
4日目午前	カンファレンス	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師 看護の方向性、看護の役割への助言 ・多職種からの意見
午後	看護計画の振り返り ストレングスモデル・セルフケア理論・コンフォート理論に基づき、QOLの視点から省察する	
5日目午前	カンファレンス 多職種協働について	
午後		自己の課題の明確化

4) 多職種連携における看護活動

実習オリエンテーションでは、施設の概要や入所者の特徴、多職種連携の理解に向けて、施設の看護師、介護士、作業療法士、介護支援専門員が、施設での役割について、パワーポイントを用いて説明がなされた。実習オリエンテーションは、事前に録画し、1時間程度に編集した動画を、学生が実習初日に視聴し、さらに、実習期間内に、多職種連携実践に必要な能力についての説明も行った。学生全員が、施設における他職種の役割について記載できており、各職種が連携することによって、入所者の生活の質が高まることも理解できていた。理学療法士、作業療法士から実際行っている計画が提供されたことも理解の促進に大きく影響していると考えられる。

多職種連携における看護師の独自性として、医学的な知識による判断能力と、予防的な観点で健康管理をしていくことについて、オリエンテーション及び最終カンファレンスによって認識できていた。実習指導者とのやり取りの際には、介護職が殆ど同席しており、介護と看護の連携、協働についての実際については理解ができていた。「主体的な学習者としての支援」の観点から、実際の場面から気づくことへの工夫が遠隔実習でもできたのではないかと振り返っているところである。

V. コロナ禍において取り組んだICTを活用した遠隔実習の効果

遠隔実習では「高齢者の自律的な生き方に寄

り添う関係を築く」ことや「高齢者の健康状態や生活に応じた看護を実践できる」こと等については課題と考えられた。このような課題には「撮影した動画から患者の持てる力を活用する看護技術の習得を支援」したり「生活援助技術と診療援助技術を1つずつ取り上げ、手順書を作成し、教員を患者役としたロールプレイを行う」等の工夫を行っている。学生の「患者に感情を寄せることができた」という感想からいえることは、遠隔実習では「リアルな患者・リアルな看護場面」「主体的な学習者としての支援」「わかる'を強化」等の工夫により、高い学習効果が得られるということであろう。「少なく限られた情報から、必要な情報を得ようとすることでアセスメントする能力が向上した」といった学生の感想からは、効果的な演習として展開できる可能性が感じられた。

一方で、実際の高齢者と関係を築くことや、緊張感の中で行われる臨地実習の役割は少ない。実際の生活行動援助を通して強さや弱さを感じ取り「老いのプロセスを支え統合を支援する」経験ができる臨地実習は欠かせない。教育効果を高める遠隔実習と遠隔実習の課題が整理されたことにより、従来の講義、演習、実習の再構築への示唆が得られたことも大きな収穫である。

代替実習にご理解とご協力をいただきました実習施設関係者の皆様に、厚く御礼申し上げます。

尚、実践報告の執筆において、病院実習は前原が施設実習は堂本と井上が主に担当した。